

指導者 必見!

コロナ禍でも 安全安心

自然体験 GUIDE BOOK

感染症対策のノウハウと新たな取組事例を探る



文部科学省

MINISTRY OF EDUCATION,
CULTURE, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN

総合教育政策局 地域学習推進課




目次 この事例集の見方



新型コロナウイルス感染症流行下における 自然体験活動の工夫・実践

Point

場面別の感染対策や
工夫を知りたい

- | | | |
|---|---------------------------------|------|
| 1 | 事前準備段階、組織体制面での対策・工夫 | P.5 |
|  | 新型コロナウイルス感染対策に関するガイドライン等の例 | P.8 |
| 2 | 自然体験活動実施段階の
新型コロナウイルス感染対策の工夫 | P.9 |
|  | コロナ禍でも実践しやすい具体的な野外活動の例 | P.11 |
| 3 | 食事提供の場面での
新型コロナウイルス感染対策の工夫 | P.12 |
| 4 | 宿泊・移動の場面での
新型コロナウイルス感染対策の工夫 | P.14 |
| 5 | 新型コロナウイルス流行を機に
新たに始めた活動・取組 | P.17 |
|  | 新たな自然体験活動や事業の提供 | P.20 |



2 取組事例の紹介

Point

具体的な対策や工夫を
事例で知りたい

- 1 アイデア溢れる工夫で感染対策
不特定多数参加の大規模イベント P.23
(静岡県 国立中央青少年交流の家)
- 2 児童・保護者・学校・行政・施設の協働で実現
4泊5日の長期集団宿泊活動 P.25
(福島県 国立那須甲子青少年自然の家)
- 3 コロナ禍の「ソログルキャンプ」で生きる力を育む P.27
(香川県 ガールスカウト香川県連盟)
- 4 大学生ボランティアとの試行錯誤で実現
地元木材を使ったオンライン体験活動 P.29
(山口県 周南市大田原自然の家)
- 5 企業との協働×オンラインの価値発見
稲の生育で食と環境をリアルに体感 P.31
(千葉県 特定非営利活動法人千葉自然学校)
- 6 リアルな体験を活かす先端技術の活用
ARネイチャーラリー P.33
(兵庫県 尼崎市立美方高原自然の家)



自然体験活動の指導者・実践者に向けたメッセージ

P.35

Point

自然体験に関連する
有識者からのヒント









新型コロナウイルス感染対策参考情報

P.38

Point

新型コロナウイルス
感染対策の最新情報

事例集の見方と注意点

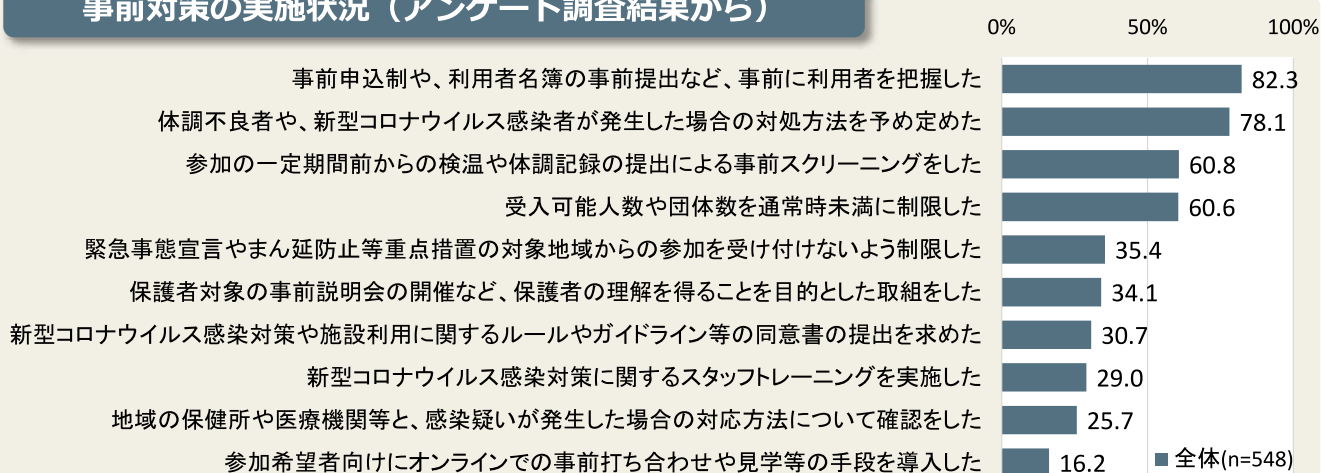
-  この事例集は、国内の自然体験活動に関連する団体や施設にご協力いただき、令和3年度にアンケート調査とヒアリング調査を実施して、新型コロナウイルス感染対策の工夫や新たな取組をまとめたものです。
-  この事例集に掲載した新型コロナウイルス感染対策の工夫は、野外炊事、キャンプ、宿泊等の一般的な自然体験活動において想定される場面で実践された事例です。具体的な場面ごとの工夫を参考にいただき、自然体験活動を通して、子供たちの心を開放し主体的な実践からの学びを伴走される一助となれば幸いです。
-  新型コロナウイルスに関する「基本的な感染対策」は、感染対策の前提としているため、この事例集では工夫としては取り上げていません。
前提とする基本的な感染対策には、「マスクの正しい着用」、「こまめな手洗い・手指消毒」、「3密（密接・密集・密閉）の回避」、「体調に違和感があるときは外出を控える」という対策が含まれます。3密の回避では、「人と人との距離は十分に保つ」、「話すときは短時間で、大声はさける」、「こまめな換気」がポイントです。
-  この事例集では、全国一斉の緊急事態宣言が解除された令和2年6月から令和3年9月までに、全国各地で実施された自然体験活動の事例に基づき作成しています。
-  掲載した事例は、活動の開催地や実施時期により、新型コロナウイルス感染症の流行状況、立地する地方自治体や教育委員会のガイドラインなど、活動の前提が異なっていることにご留意ください。
-  新型コロナウイルス感染対策は、国内における流行状況、新たな医学的エビデンスの蓄積、新たな変異株の出現、ワクチンの接種状況等により、日々変化してきました。新型コロナウイルス感染対策の最新情報や、関連するガイドライン等は、巻末（P38）に掲載の参考情報などを各自ご確認ください。



新型コロナウイルス
感染症流行下における
自然体験活動の工夫・実践

1 事前準備段階、組織体制面 での対策・工夫

事前対策の実施状況（アンケート調査結果から）



約 8 割の団体が、感染者発生時の対処方法を定めた。
一方で、感染対策に関するスタッフトレーニングを実施した団体は、約 3 割。

事前申込や利用者名簿など参加者を特定する工夫

- 参加人数の把握が困難な大規模イベントを取りやめ、事前予約制の小規模イベントへ変更した。また参加対象を家族単位とすることで、感染対策を徹底して行ってもらうことが可能となった。
- 事前申し込み不要のイベントにおいて、来場者の行動を記録するために、受付で名簿に記名してもらい、名簿の番号に対応したシールをつけてもらった。それぞれの体験ブースでは、シールの番号と来場時間を控えることで、個人の行動履歴を記録した。（P23 国立中央青少年交流の家の事例参照）

体調不良者・感染者が発生した場合の対処方法の準備

- 感染者が出た場合のフローチャートを作成。感染の疑いがある場合、まずは、疑いのある者とそれ以外の者の部屋を分けることを優先している。帰宅後は、検査をして、報告いただくように定めた。
- 体調不良者や、新型コロナウイルス感染者が発生した場合は活動を中止し、個別に送迎できるように保護者と連携をとった。事前に、発熱や風邪ぎみの様子があったらご遠慮してほしいと複数回伝えるようにした。

参加前の検温・体調記録等による事前スクリーニング

- 事前申し込み不要のイベントの開催にあたって、来場者に対する事前の体調管理のお願いとして、当日までの14日間に、新型コロナウイルス感染症の諸症状（強いだるさ、咳、痰、のどの痛み、発熱、息苦しさ、下痢、嘔吐、味覚・嗅覚障害）が出た方は参加を控えるようHPでの案内を行った。
- 事業開催日の1週間前より検温を実施し問診票に記録してもらい、当日受付時に提出をもらった。
- 大学生スタッフが参加することについて児童の保護者の理解を得るために、大学生スタッフには抗原検査を受けてもらっていること、大学と細かな連携を取っていることを説明した。（P25 国立那須甲子青少年自然の家の事例参照）



受入可能人数や団体数の制限

- 緊急事態宣言下では受入可能人数を通常時の5割、まん延防止等重点措置下では8割とした。
- 通常は7泊8日の無人島キャンプを、2泊3日で実施した。例年は年1回であったが、密回避のために参加人数を半分にしたところ、募集が多く集まり、経験できる子どもを増やすために2回に増やした。

保護者の理解を得るための取組

- 参加する児童の各学校の保護者説明会に職員が出向いて、事業のねらいとともに感染防止対策を説明し理解を得た。（P25 国立那須甲子青少年自然の家の事例参照）
- 所属会員を対象とした宿泊キャンプを実施するにあたり、保護者とのやり取りを丁寧に行った。保護者の理解を得るために、保護者のLINEグループに、キャンプの開催要項を載せたうえで、参加に関するアンケートをとった。アンケートは、①同意して参加する、②同意するが、参加は見合わせる、③同意できないので参加しない、の3択で回答してもらった。また、心配なら部分参加でもよいと参加の敷居を低くした。
- YouTubeの動画で、スタッフの紹介とあいさつ、活動の目的説明等を行い、参加者に動画を事前に確認するようお願いしている。動画のよいところは、時間的な制約なくいつでもどこでも見られる点である。
- 主にメールのやり取りで保護者の疑問や不安を取り除くよう努めた。感染リスクをゼロにすることはできない点を伝え、不安・懸念があれば、安心してお子さんを送り出せるタイミングを待ってほしいのではと伝えている。対話によって不安が和らぐことがあると思う。

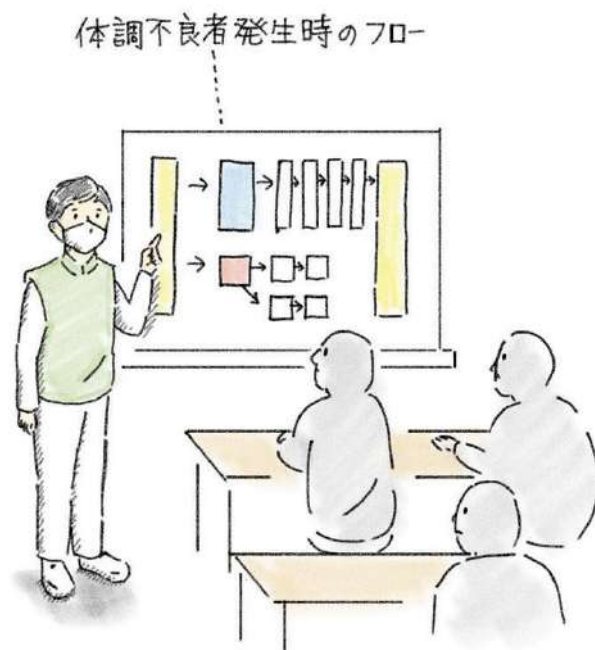
感染対策に関する同意書の提出

- 施設において、新型コロナウイルス感染対策や施設利用に関するガイドラインの文末に同意署名欄を設け、利用にかかる書類と併せて提出してもらっている。
- 施設において、「コロナ感染拡大防止対策チェックシート」を作成。施設利用者には、入所時に提出してもらった。チェックリストの内、一つでもチェックできない項目がある場合は、利用を控えてもらっている。

感染対策に関する

スタッフトレーニング

- 保健所職員を職員研修の講師として招き、感染対策の知識を深めた。職員研修の頻度は、緊急事態宣言の発出時等、必要な時に随時行った。月に1回は会議を開き共通理解を図った。
- スタッフトレーニングは通常のトレーニングメニューに追加して、「感染予防に関して」「手洗いうがい」「朝夕の検温の実施と記録」「体調不良者の早期発見と体調不良者が出た場合の対応」を実施。



地域の保健所等との事前の調整

- 感染疑いが発生した場合の対応方法については、地域の保健所や医療機関等のほか、県の健康福祉事務所に確認した。また、保健所に電話連絡がつかない場合の FAX での相談等についても教示を受けた。確認した対応方法は、学校の先生や教育委員会に伝えた。

オンラインの事前打ち合わせや施設見学

- 小学校低学年を対象としたキャンプにおいて、参加希望者にオンラインの事前打ち合わせを開催した。保護者向けに持ち物や服装などの質問に答えるオンライン説明を行い、360°カメラツアーで施設内の様子をインターネットで見ることができるように対応した。衣服がどのようなものか画像で見えながら確認したり、口頭でその場で補足ができたりするというのが有意義だった。
- 学校団体は事前に打ち合わせや下見を行わなければならない、オンラインでの実施も求められた。事前説明のために学校に出張したこともあり、プログラムを持参して指導したこともあった。

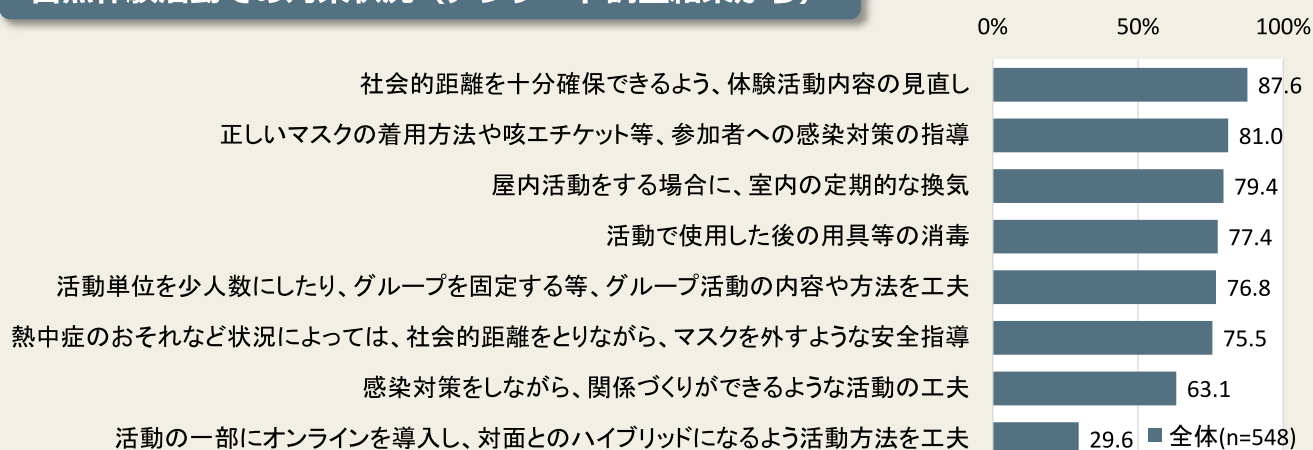
新型コロナウイルス感染対策に関するガイドライン等の例

- 掲載した資料や情報は、随時更新されているため「団体・施設名」「資料名称」のキーワードでインターネット検索をしてください。

団体・施設名	資料名称／URL	
国立那須甲子 青少年自然の家	<p>🍷 新型コロナウイルス感染防止対策ハンドブック</p> <p>https://nasukashi.niye.go.jp/?page_id=3366</p>	
国立中央 青少年交流の家	<p>🍷 新型コロナウイルス感染症対策に対する対応</p> <p>https://fujinosato.niye.go.jp/covid-19/</p>	
熊本県立 天草青年の家	<p>🍷 感染症関連情報 利用者の皆様へのお願い</p> <p>http://www.k-seishonen.com/amakusa/system/covid-19.html</p>	
熊本県立 豊野少年自然の家	<p>🍷 感染症関連情報 利用者の皆様へのお願い</p> <p>http://www.k-seishonen.com/toyono/covid-19.html</p>	
尼崎市立 美方高原自然の家	<p>🍷 新型コロナウイルス感染症対策における施設のガイドライン</p> <p>https://www.obs-mikata.org/blog/wp-content/uploads/2021/10/7d6c39e768740161b7e7a4c527100a7a-1.pdf</p>	
周南市 大田原自然の家	<p>🍷 新型コロナウイルス感染症の対応に関するお願い</p> <p>http://gokan-furusato.org/ootabara/img/covid.pdf</p>	
公益財団法人 日本 YMCA 同盟 国際青少年センター YMCA 東山荘	<p>🍷 ご宿泊のみなさまへ</p> <p>https://www.ymcajapan.org/tozanso/wp-content/uploads/sites/2/2020/07/20200713.pdf</p>	
公益財団法人 日本レクリエーション協会	<p>🍷 新型コロナウイルス感染拡大予防対策ガイドライン</p> <p>https://recreation.or.jp/WP_ORJP/wp-content/uploads/2021/11/covid1_kaitei.pdf</p>	

2 自然体験活動実施段階の 新型コロナウイルス感染対策の工夫

自然体験活動での対策状況（アンケート調査結果から）



約6割の団体が、感染対策と関係づくりを両立する工夫を実施。

約3割の団体が、活動の一部にオンラインを導入し、対面とハイブリットになる工夫を実施。

感染対策を踏まえた体験活動内容の見直し・工夫

- 疲れている状態だと感染しやすくなるを考え、就寝時刻を早くし、起床時刻も余裕をもったスケジュールに変更した。朝夕の体温測定の時間を確保して、プログラムが終わるごとに体調を確認した。
- 以前は班に1つの地図を渡していたが、近寄らなくてもよいよう各自のしおりに地図を印刷するよう変更。
- 野外活動で20数名を相手に説明が聞こえるように、マイクを使っていたのは密を避ける意味で有効だった。
- 非接触型のゲームを勉強する機会となった。持っていた知見に工夫を加えて、非接触型にしたものが多い。

少人数やグループ固定化などグループ活動の工夫

- 大人数の場合は、オリエンテーリングや登山の開始を時間差でスタートするよう変更した。
- 参加できる体験活動を複数用意することで、参加者が一か所に集中することなく分散して活動できた。
- 安全指導の点からも、グループ活動の際は担当リーダーを固定化した。担当リーダーを固定化することにより、子どもの体調の変化など子どもたちが何かあった時に、担当リーダーに相談しやすい環境になった。

参加者への感染対策の指導・注意喚起

- 全員が集まる「はじめの会」で、子どもたちにマスクをする理由、手を綺麗にする理由を話している。子ども自身が自分で感染対策を身につけることが大事なので、子どもに分かるように伝える役目があると思い取り組んでいる。
- 施設内の壁や床に、新型コロナ感染対策に関する掲示物を貼り注意喚起をしている。



2メートルの距離を展示



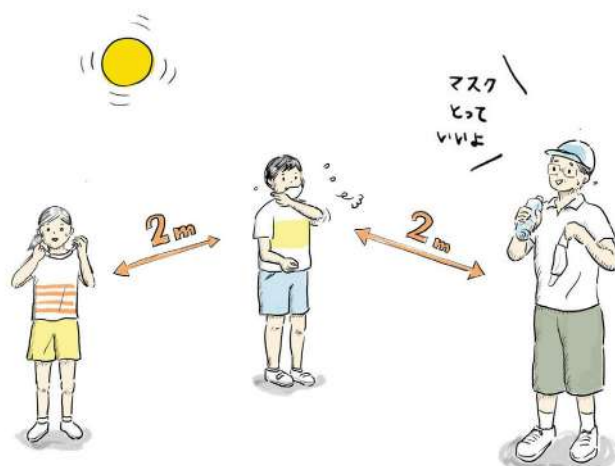
マスクの正しい着用方法



手洗い場で距離を取りやすく

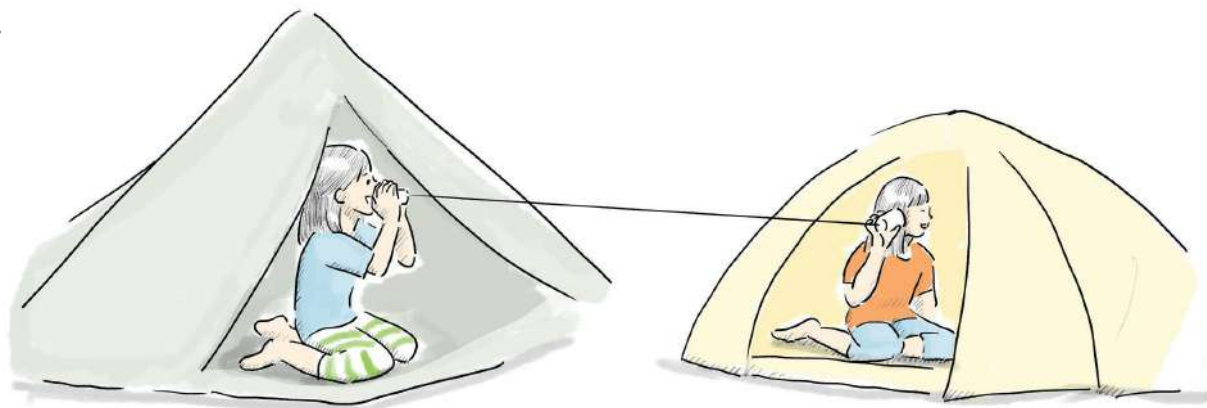
マスクを外すような安全指導

- 熱中症対策もふまえて、必要に応じてマスクを外すよう声掛けをした。
- 水辺ではマスクが濡れて息ができなくなる可能性もあるため外している。また、走って息が上がる活動をする場合もマスクを外している。
- スタッフも子どもと同様にマスクを着脱しながら声掛けをするようにしている。



感染対策をしながら関係づくりができる活動

- グループにおける「振り返り」の時間をしっかり取り、多様な意見の理解、自分の意見をはっきり伝える力の育成、グループにおける行動の合意形成などに注視しながら支援した。
- 感染対策のためにソロテント泊としたが、離れていてもコミュニケーションがとれるように糸電話を用意した。



コロナ禍でも実践しやすい具体的な野外活動の例

ストレートハイク

(尼崎市立美方高原自然の家)

- 接触を伴うプログラムが難しいなかで、お互いが自然と距離をとりながら、協力ができるプログラムとしてお勧め。
- スタート地点と、ゴールまでの距離・方角が示され、地図とコンパスを頼りに林などのフィールドを一直線に進みながら、ゴール地点を探すグループ活動。
- 子どもたちは、自然と数十メートル離れた位置でコミュニケーションをとることになる。指導者は、全体が見えるような位置で、安全管理を行う。



スコアオリエンテーリング

(三の倉市民の里 地球村)

- 地球村が有している里山を会場に、アルファベットを描いた缶を設置しておき、子どもたちが缶を見つけて解答用紙に記入していく活動である。
- 地球村の地図と各アルファベットのポイント数が載っている解答用紙を事前に学校に送付する。地図と解答用紙を見ながら、制限時間内により多くの得点を獲得できるよう、どのルートで巡るかを事前にグループで作戦会議をしてもらっている。
- 「協力・協調」をねらいとするスコアオリエンテーリングのような活動は、学校の先生方からも喜ばれた。コロナが落ち着いた後も、スコアオリエンテーリングは学校向けに薦めていける活動のひとつ。

SDレクリエーション

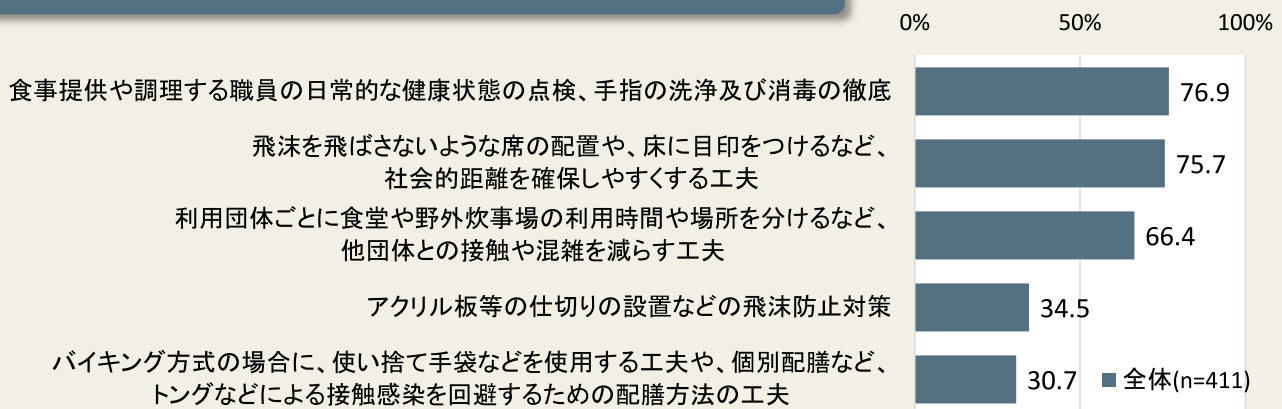
(熊本県立豊野少年自然の家)

- 宿泊、日帰りの受入事業のレクリエーションとして、SDレクリエーションを実施している。SDはソーシャルディスタンスの略。
- コロナ禍で制限がある中、一から活動を考えて作り上げるのは時間、費用の面でも難しい。既存のレクリエーション活動の中から、密集したり、ひとつの道具を皆で共有したりする活動を避けるよう、ひとつずつ活動をチェックして、SDレクリエーションとして組み合わせて提供している。
- SDレクリエーションの競技種目は、スリッパとばし、目つぶり片足立ち、足し算的当て、新聞ウォーク、しりとリレーなどの計8種目。班ごとに得点を競い合う。

3 食事提供の場面での

新型コロナウイルス感染対策の工夫

食事・炊事での対策状況（アンケート調査結果から）



約 8 割の団体が、職員の健康状態の点検や席の配置の工夫等の対策を実施。
一方で、食事の配膳時に接触感染を回避する対策を実施した団体は、約 3 割。

利用団体ごとに利用時間や場所を事前に割当

- 団体間の食堂の利用時間を調整し、テーブルを固定化して他団体との接触を回避している。
- 野外炊事場所では、複数団体が一緒にならないように時間による制限を行った。

食堂の消毒に関する工夫

- 食堂の各テーブル上に、表面に「消毒済み」、裏面に「使用中」と書かれたカードを置いている。「消毒済み」の面を表にして置いておき、食事が始まる時に、「使用中」に裏返してもらう。食事後、テーブルを消毒したら「消毒済み」に再度裏返してもらうことで、利用者に消毒してもらう仕組みを作っている。

食堂の座席や床の目印など距離を確保しやすい工夫

- 食堂の収容人数を半分に制限し、座席を前半と後半で別の席に座るように工夫。食堂に前半に入る方は赤、後半に入る方は緑で椅子の目印を色分けしている。正面ではなく互い違いに座れる工夫をした。
- 全席一方向を向いての配列と、前後・左右の十分な間隔を確保した。食事の受けとりや返却については、距離を保てるように目印を床に配置。CO2濃度計による換気状況の確認をし、空気の入替えに留意した。

食事の提供や配膳方法の工夫

- バイキングから個別配膳方式に変更。おぼん、箸、スプーン、ドレッシング、水の配膳については、引率の先生に協力をお願いした。(下図赤枠の写真②、④、⑤)



①入口で手指消毒



②おぼん・箸・スプーン



③おかず・ご飯・汁もの



④ドレッシング類

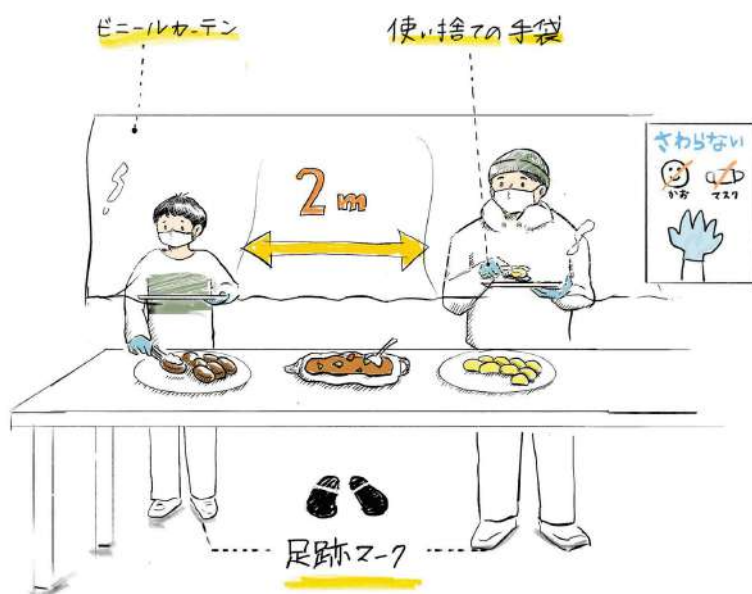


⑤水

- バイキング形式で提供。セルフサービスでお代わりをする場合は、マスクの着用と使い捨てのビニール手袋をつけてもらうようにした。(右図イラスト)

野外炊事の工夫

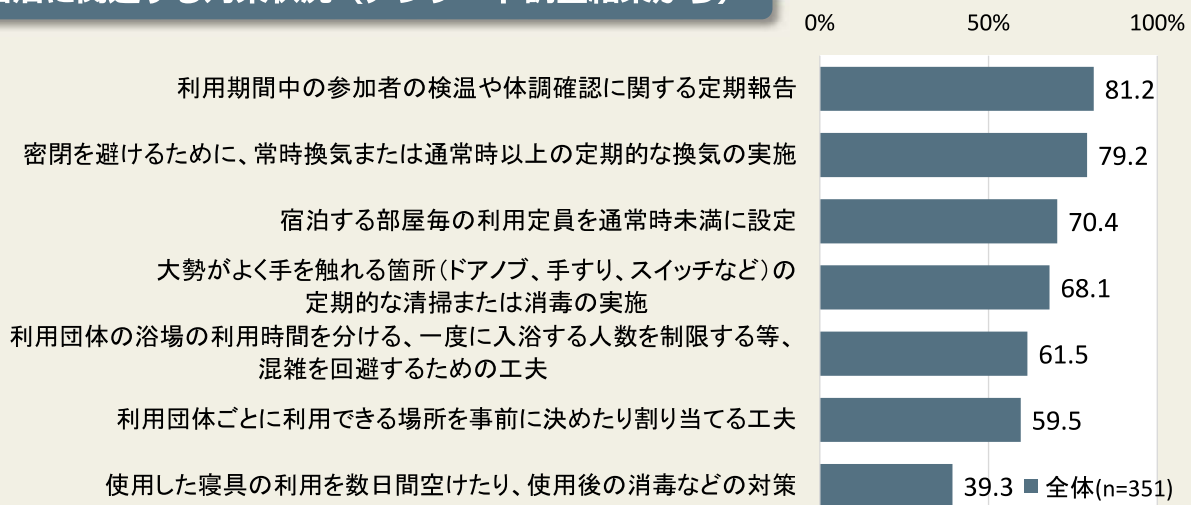
- 施設で提供する野外炊事プログラムにおいて、コロナ前同様の実施方法を可能としながら、団体の要望によっては、食材を切った状態で提供する、火起こしに特化した体験として提供するなど、基本的な感染対策は前提としながら、団体ごとの考え方に応じて、柔軟に対応できるよう工夫した。
- ソロクッキングスタイルを採用した。野外炊事セットを一人ずつ用意し、他人と物は共有しない、接触しないスタイルにした。自分の野外炊事セットは持ち帰り、繰り返しキャンプに持ってきてもらっている。セットには、フライパン、フライ返し、おたま、網、折り畳み簡易コンロ、固形燃料、軍手、マッチ、自分の食器が入っている。(P27 ガールスカウト香川県連盟の事例参照)
- 乾パンの空き缶を利用して一人前を炊飯した。釣った魚も自分で焼いた。釜戸は班単位で、スペースを空けて利用した。
- 野外炊事を「防災プログラム」として位置付けて、実施。単に野外炊事を中止する、という判断をせずに、制限があるなかでもできるプログラムとして提供した。



4 宿泊・移動の場面での

新型コロナウイルス感染対策の工夫

宿泊に関連する対策状況（アンケート調査結果から）



約 8 割の団体が、参加者の体調等の定期報告、定期的な換気を含む基本的な感染対策を実施。
約 4 割の団体が、消毒等の寝具に関する感染対策を実施。

利用団体ごとに利用場所や時間を事前に割当

- 入所から退所まで団体毎に同じ場所を利用するよう、事前に調整。動線も重ならないよう配慮している。
- 6 部屋程度の近接した宿泊室を 1 つのブロックとし、ブロック内に複数の団体が宿泊しないようにした。
- 混雑を避けるために、利用団体の来館時間や出発時間を調整している。

子どもの検温や体調管理の工夫

- グループ毎に保健係を決めて、子ども同士で体調管理や消毒の声掛けをした。集合のタイミングで、保健係から大人に体調管理の報告を行った。役割を担うことで、自分でやるという気持ちも持たせるようにした。
- 子どもの体調確認は、体温、だるさ、頭痛、腹痛など 10 項目程を確認している。宿泊の場合は、就寝時と起床時に子どもにチェック表を記入してもらい、大学生のスタッフと職員でダブルチェックを行った。
- 参加者のしおりに検温の欄をつくり、記録した。しおりを家に持ち帰るため、保護者も確認することができ、学校に提出する時も役に立つのではと考えている。

ドアノブ・スイッチ等によく触れる場所の消毒の工夫

- 大勢がよく触れるドアノブ、手すり、スイッチなどは、施設職員による朝・昼・夕の定期消毒、清掃業者による消毒作業をしている。廊下やトイレなど共用部分のスイッチには、施設職員が ON/OFF を行うよう、スイッチ部分のお知らせを貼っている。
- 生活の動線、手すり、スイッチなどの箇所は、宿泊室点検終了のタイミングで職員が消毒を行っている。宿泊の部屋を3日以上利用しない場合は、消毒を省略することもある。



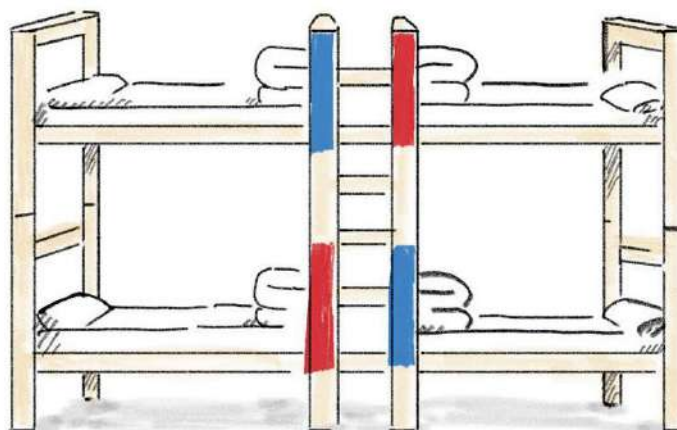
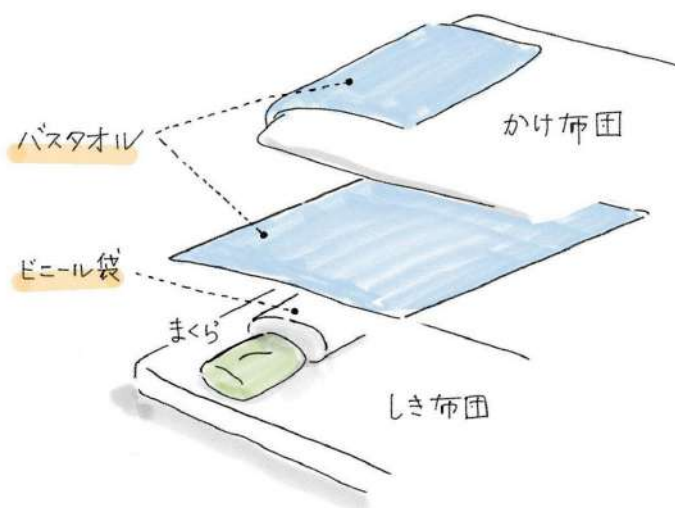
スイッチ部分のお知らせ

入浴時に「密」にならないための工夫

- 脱衣所や浴場の混雑を回避するための工夫として、利用団体の入浴時間を通常より長く設定した。
- 他の団体と入浴時間が重ならないよう、事前にプログラムを調整している。

寝具・シーツの感染対策

- シーツは通常2枚用いるところ、下1枚、上2枚の計3枚用いるような取組を行った。また、枕にビニールシートとタオルを被せることで、他人が触れたところの接触を減らすようにした。(右のイラスト)
- 「敷、掛け、枕カバー一体型」のシーツから、「シーツ4点セット(敷きシーツ、掛シーツ、毛布カバー、枕カバー)」に変更した。利用のたびにシーツを4枚脱着する煩わしさはあるが、利用者から清潔感と安心感があるとの感想をもらっている。
- 同じベッドを次の利用者が連続して使わないようにする工夫として、各ベッドに赤と緑のテープを貼って、団体ごとに使用するベッドのテープの色を指定している。



ソロテント泊

- 無人島キャンプでは他の参加者と密にならないよう、一人用テントを活用した。密を避けることができ、保護者の方にも安心してもらえると考えた。安価のものを、参加費の中で賄う形で購入した。宿泊は一人だが、基本的な活動は班単位で実施した。子どもから「一人で寝るのはさみしい」という声があったが、一人で寝るチャレンジとすることで、自己肯定感を上げることができると感じた。一人用テントを利用し、自分と向き合うようなプログラムや、人とのつながりのありがたさを感じるプログラムなどを開発できるのでと感じている。



屋根の下に設営したソロテント

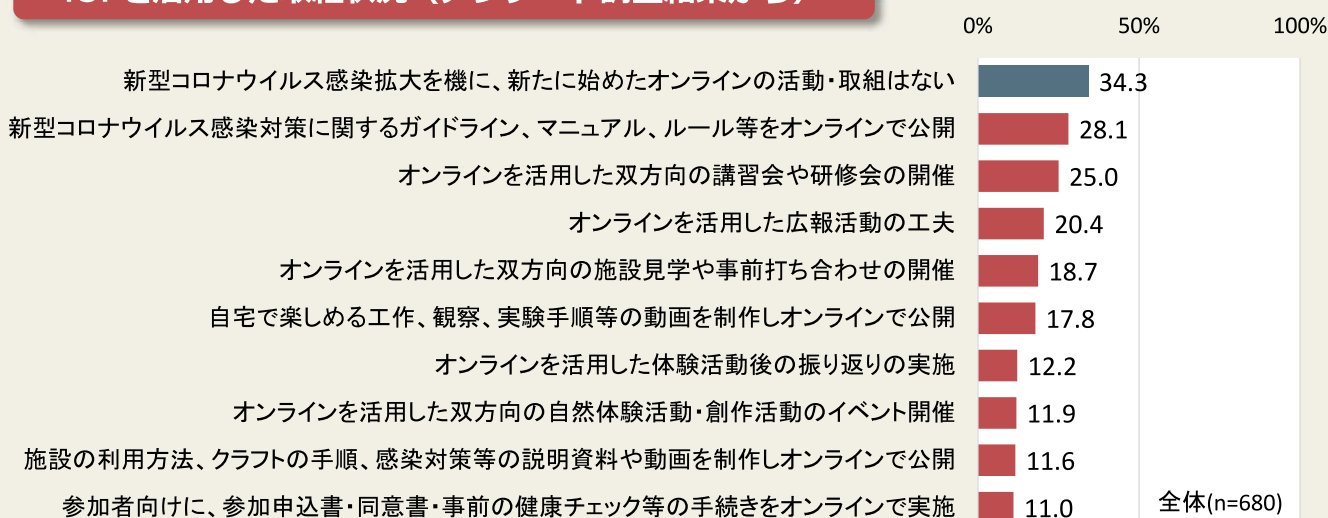
- 廃校になった小学校をキャンプ場にした会場で、小学校教室内に分散してソロテントを設営した。広々とした空間利用を心がけ、一般的な小学校の教室の広さにテント4張を4隅に設置した。ソロテント同士の距離を離し、テントの出入口の向きも変えた。(P27 ガールスカウト香川県連盟の事例参照)

移動に関する感染対策・工夫

- 活動場所に直接集合し解散するようにプログラムを変更し、施設から活動場所までのマイクロバスでの移動をなくした。
- 狭い車内で距離が近くなる時間を長時間にしないために、活動場所を施設から20分程度で行ける場所に見直して、移動時間を減らした。
- バスの定員に対して半分の乗車人数にしている。家族連れの場合は隣を詰めていただいている。
- 密を回避するために、社会福祉協議会などが保有するバスを用意してもらい、1台につき定員の50%以下の人数で送迎を行った。費用面については、助成金を活用している。

5 新型コロナウイルス流行を機に 新たに始めた活動・取組

ICTを活用した取組状況（アンケート調査結果から）



約2～3割の団体が、ガイドライン等の公開、オンラインの研修会等を実施。
一方で、約3割の団体が、新たに始めたオンラインの活動・取組はないと回答。

ICT活用：オンライン講習会や研修会の開催

- コロナ感染拡大前に対面で行ってきた研修については、事前学習等をオンラインでできることが分かった。オンラインを活用しながら、コミュニケーションが大事な部分是对面にするなど織り交ぜている。
- ボランティアスタッフの研修で、先輩ボランティアに一部オンラインで参加してもらい、質問に答える、相談役になるという立場で参加していただいた。オンラインのメリットとして、時間が限られているため整理して伝えるようになることや、移動時間の省略、交通費がかからないことが挙げられる。一方で、言葉やデータのやり取りが一方通行になったり、意図が伝わらなかつたりする難しさがある。



ICT 活用：オンラインを活用した広報活動

- 印刷費や郵送費用の削減のために紙媒体で報告書を送付するのをやめて、参加した方たちにデータで配信するように変更した。
- フェイスブック上での有料 PR や Google 検索における有料 PR などを使用した広報した。一般層・青年層に対して集客力が弱い点が課題であったため、SNS の活用に挑戦した。まだ様子見の段階で、効果の有無は分からないが、情報収集しながら改善を加えていく。

ICT 活用：オンラインを活用した事前打ち合わせ

- GIGA スクール構想により学校のインターネット環境が整備された。学校との事前打ち合わせにおいては、オンライン会議でホームページや資料を提示しながら、チャットを活用して解説と質疑応答を行った。オンラインも活用するが、必ず 1 回は現地に来ていただく約束となっている。
- 登山活動などの野外活動を実施する場合は、安全面の確認や、教育効果を高めるために、現地での下見が重要となる。オンラインでの事前打ち合わせが進むなかで留意すべき点である。
- オンラインによる取組が進んだことで気付いた点として、オンラインであれば、参加者の荷物確認を、画面に向かって「これ出してください」と促すことで、皆で確認することができる。

ICT 活用：施設の利用方法や体験活動等の動画を制作し公開

- 360°カメラを利用し、各研修室をホームページ上に公開した。360°カメラによって、研修室の大まかな広さを見たり、設置されているものを確認したりできるという声を聞いている。
- 「退所点検 やって見た！」という動画を作成し子どもたちに見せたところ、清掃意識が高まり、コロナ前よりも部屋を片付けて退所するようになった。
- シーツの畳み方をはじめとしたオリエンテーション動画は、特に学校団体から好評。事前学習として見ることによって指導の時間が減った、畳み直しの時間が減った、という声を聞く。
- 登山コース動画では、引率者の誘導ポイントや危険個所を説明している。動画活用の例として、事前打ち合わせでの利用や、下見に来た先生が下見に来ていない他の先生に動画を活用して説明する等があげられる。誰も下見をしたことがない場所に子どもを連れていくことは不安であると思う。どのくらいの傾斜があり、どのような危険があるのか等の地理的な安全面に関しては、現場に来て実際に見たほうがよい。

ICT 活用：オンラインイベント・体験活動の開催

- “ハウス「食と農と環境の体験教室」知って、作って、食べて、つながって！”は、コロナ禍の中、初めてのオンラインでの開催となった。様々な地域からご参加いただいた全 11 家族の皆さんと、自宅で稲を育てる体験、「食品ロスをなくす」をテーマで考えたオリジナルカレー調理の体験を通じて、オンラインならではの“食”と“農”と“環境”のつながりを学んだ。(P31 特定非営利活動法人千葉自然学校の事例参照)
- オンラインツールの Zoom を使って、木のロボット「木 bot」を設計し、後日自宅に届いた部品を、それぞれの家でみんなと話しなが組み立て完成させるハイブリッドな体験活動を開催した。山口県の体験学習法である AFPY の手法の流れに沿ったプログラムを設計した。
(P29 周南市大田原自然の家の事例参照)



おうちで 60 秒チャレンジ

(公益財団法人日本レクリエーション協会)

- 「おうちで 60 秒チャレンジ」は、自宅で家族などのできるレクリエーション活動（からだを動かすあそび）にチャレンジし、チャレンジの様子を動画撮影し、Twitter のハッシュタグを使って投稿するというもの。
- 「おうちで 60 秒チャレンジ」の種目は、コロナ禍で新たに開発したものである。主にレクリエーション公認指導者からアイデアをもらって考案したものと、平成元年から継続している「チャレンジ・ザ・ゲーム」の種目をアレンジして考案している。
- 60 秒チャレンジの種目を開発するうえで工夫したことは、新聞紙など身近な物を使うこと、適度な運動量があること、あそび方がシンプルなこと、夢中になれること、見ていて楽しいことである。
- コロナ禍に自宅でできる取組としてスタートしているが、高齢者施設や公民館、小学校などでも取組可能。また、SNS を活用することで、同日に同じ場所に集まることなくイベントが開催できることは、今後も継続できると考える。
- 体験した人からの評判は良く、「楽しかった」「他の人ともやってみたい」という声をもらっている。

おうちで 60 秒チャレンジ参加の流れ

1. ウェブサイトであそび方を確認 (下記 URL または QR コード)
URL: <https://www.recreation.jp/challenge>
2. 使用する用具を準備
3. スタート前から終了後までチャレンジの様子を動画撮影
4. 「おうちで 60 秒チャレンジ」Twitter 公式アカウントをフォロー
5. 共通ハッシュタグ「#おうちで 60」と「#スポーツインライフ」をつけて動画を投稿
6. 日本レク協会が動画を確認後、記録をつけてリツイート
7. Web サイトにアカウント名と記録を公開
8. 期間限定ランキングの上位記録には賞状と副賞 (QUO カード) を授与



新たな自然体験活動や事業の提供

- 新型コロナウイルス感染対策等の様々な制約の中で、工夫を重ね、従来とは異なる新たな試行を行ったことにより、参加者の幅や、活動の幅、今後の事業展開の可能性を広げている。

尼崎市内ツリーイング体験

(公益財団法人日本アウトワード・バウンド協会)

- 令和2年度に文部科学省委託事業として、尼崎市内でツリーイング体験を8回、1泊2日のキャンプを3回開催した。
- 尼崎市の公園で、夏休み以降の土日に、日帰りのツリーイング体験を行った。少し難しいことでもできた時の喜び、一人ではできないけど他の人に助けってもらったからできた、という経験を子どもたちに提供することがねらい。
- 尼崎市に協力を依頼した結果、行政、教育委員会、公園の管理団体にスムーズに協力していただくことができた。



ツリーイング体験

小枝や木の実の工作キットの販売

(三の倉市民の里 地球村)

- 「小枝の工作」や「木の実の工作」は当施設人気の活動の1つである。コロナ禍以前は、申し込みをした参加者に小枝、木の实、紐、リボン等選んでもらい職員が指導をしていた。
- コロナ禍でも参加しやすいように、説明書を付けてキットにしたところ、お土産として、また家でする工作として購入する人も多く、需要の高さに驚いた。
- 地球村で工作の体験をする場合も、必要な道具を貸出し、セットさえすれば、最小限の説明で工作を楽しめ、他グループと一緒にすることなく好きな時間に体験できるようになり、キットの売り上げにもつながっている。



工作キットの販売

黒松内子ども自然体験～ぶなの森の夏休み～

(黒松内ぶなの森自然学校)

- 黒松内子ども自然体験～ぶなの森の夏休み～では、定員を10名にして、少人数で開催した。プログラムの内容は、海あそび、川あそび、動物や農園作業などである。
- スタッフの人数を手厚くし、体験の質を保った。メインスタッフと子どもたち、子どもたち同士の関係性を重視した。メインのスタッフを固定したことで、参加者の安心感につながった。
- 文部科学省の委託事業であったため、コロナ禍であっても、参加費を抑えて自然体験活動を提供することができた。



川あそび

こども自然デイキャンプ・こども自然キャンプ (国際青少年センターYMCA 東山荘)

- 文部科学省の委託事業として、令和2年度に地域の子供や家庭向けのデイキャンプを3回、宿泊を伴うキャンプを1回開催した。
- 地域の子供や家庭を対象としたキャンプは、その後も継続的に開催し、令和4年1月時点で、日帰りを合計23回、宿泊を合計15回開催している。
- コロナ禍以前から実施していた活動内容を、感染症対策をした上で提供した。プログラムを提供するにあたって、医師に感染対策の観点からどこにどのようなリスクがあるのかをチェックしていただいた。感染リスクが相対的に低い野外での活動を中心とした。
- デイキャンプでは、沢歩き、山登りの他、清掃作業や薪割り等のワークも実施した。宿泊を伴うキャンプでは、YMCA 東山荘から徒歩でのハイキング、自転車で長距離移動するもの、野外泊、富士箱根トレイル完遂等を実施した。
- 委託を受けて広範囲にチラシ配布ができたので、それまで主催プログラムの情報に触れていなかった方々にも認知される機会を得た。また、委託事業により自然体験の参加費を抑えることができた。デイキャンプに一回参加した方が、その後も継続参加してくれたことや、デイキャンプに初めて参加し、その後宿泊に来た方もいる。



こども自然キャンプでの登山

地域との連携でマイクロツーリズムの企画・運営 (黒松内ぶなの森自然学校)

- マイクロツーリズムは、車で2～3時間圏内の市町村在住の親子を対象に、黒松内町の自然や施設を生かしたプログラムを提供する活動。□1回目がサウナ、2回目がキノコ、3回目が馬をテーマとして、全3回で開催した。内容ごとに定員は異なるが、どれも定員を超える応募があった。
- マイクロツーリズムは黒松内ぶなの森自然学校独自の企画ではなく、町や助成金による運営資金面のバックアップを受け、地域との連携で関わらせてもらった。
- 1回目の「サウナ」では、サウナで使うヴィヒタ（白樺の枝葉を束ねたもの）に黒松内町の素材を使おうと、森林の中を歩きながら収集した。2回目の「キノコ」では、講師の方にキノコが森で果たす役割を話してもらったうえで、町の共有林でキノコを採取して食べる体験をした。3回目の「馬」は、馬と触れ合い裸馬にのるプログラムで、今後、主催事業として検討していくきっかけになった。
- これまで当団体のプログラムに参加したことがない方の参加もあり団体の広報につながった。講師の方にプログラム提供をお願いしたので、当団体のプログラム開発にもつながった。
- 行政からの助成、観光協会との協力、企業とのつながりなど、コロナ禍前からの関係性が、コロナ禍での活動につながり、具体的な事業で一緒に協働してつながりを実感できた。コロナ禍で主催事業が減った時も、文部科学省委託事業があったことで何とかスタッフ数も変わらずに継続することができた。



マイクロツーリズム 裸馬にのり自然を楽しむ



取組事例の紹介

1 アイデア溢れる工夫で感染対策 不特定多数参加の大規模イベント

■ 活動名称

オープンハウス 2020 ～SDGs フェスタ～

Point

創意工夫の感染対策で、不特定多数・事前申込不要の大規模イベントを開催。コロナ禍における安全安心なイベント運営ノウハウ。

■ 団体・施設名称

国立中央青少年交流の家

■ 所在地

静岡県御殿場市

■ URL

<https://fujinosato.niye.go.jp/>



1 活動概要

■ 対象者

家族はじめ不特定多数が対象

参加者数：2,150人

(来場者 1,950人、体験活動提供者 200人)

■ 開催場所

国立中央青少年交流の家

■ 開催時期

令和2年10月25日

■ 申し込み方法

チラシ、インターネット等で周知、事前申込不要

2 活動のねらい

当交流の家の活動プログラムをはじめとした様々な体験活動を通して、体験活動の楽しさを体感し、体験活動の重要性の普及と当交流の家の周知を図る。

また、「SDGs」をキーワードに据え、SDGsに取り組む団体の取組情報の発信と交流の機会とすることによりSDGsの啓発に寄与するとともに、関係団体とのパートナーシップを一層推進し、地域から広く必要とされる施設づくりの一環とする。

3 活動の内容

■ 多様な体験活動

ミッションオリエンテーリング、ピザづくり、木工体験、ジオパークすごろく、ハーバリウム制作体験 などSDGsとのつながりのある体験活動

■ フードドライブ&衣料品回収

各家庭で余っている食料品や衣料品の回収

■ SDGs マルシェの開催

SDGsにつながる商品を集めたマルシェ

■ シトラスリボンプロジェクトへの賛同・啓発

■ 御殿場市とのコラボレーション企画

バスフェス、文化協会、国際交流協会 など

4 工夫した点

■ イベントの事前の感染予防対策

来場者の方にはホームページで感染対策の案内等を行い、体験提供者には事前に感染対策の内容を送付し、事前の体調管理をお願いした。具体的には、当日までの14日間の間に、新型コロナウイルス感染症の諸症状（強いだるさ、咳、痰、のどの痛み、発熱、息苦しさ、下痢、嘔吐、味覚・嗅覚障害）が出た方は参加を控えるよう案内をした。

体験の提供者は、当日の朝9時に集合し、消毒液等を渡しながら感染対策に関して説明を行った。

来場者はほとんどが車で来るため、駐車場の駐車台数で来場者数を概ね管理した。

■ 来場者の行動記録に関する工夫

事業中や事業後に、体調不良者が発生した場合に、接触の可能性のある他の参加者を特定できるよう、当日は、シールや名簿を活用して、来場者の行動を記録した。来場者には受付で名簿に記名してもらい、1～2000までの番号を振った。その番号に対応したシールを胸につけてもらった。それぞれの体験ブースでは、シールの番号と来場時間を控えることで、個人の行動履歴を記録した。

体験ブース	来場時間	来場者番号	体験時間	来場者番号	体験時間	来場者番号
1	10:00	108	10:20	28	11	
2	10:00	102	10:27		12	
3	10:00	102	10:28		13	
4	10:00	109	10:28		14	
5	10:00	114	10:30		15	
6	10:00	115	10:31		16	
7	10:00	116	10:36		17	
8	10:00	117	10:37		18	
9	10:00	118	10:38		19	
10	10:00	119	10:38		20	
11	10:00	120	10:37		21	
12	10:00	121	10:38		22	
13	10:00	122	10:38		23	
14	10:00	123	10:38		24	
15	10:00	124	10:38		25	
16	10:00	125	10:38		26	
17	10:00	126	10:38		27	
18	10:00	127	10:38		28	
19	10:00	128	10:38		29	
20	10:00	129	10:38		30	
21	10:00	130	10:38		31	
22	10:00	131	10:38		32	
23	10:00	132	10:38		33	
24	10:00	133	10:38		34	
25	10:00	134	10:38		35	

※来場時間の記入は、15～20分おきでお願いします。

ブース用來場者記録表



参加者用シール



体験ブースでの受付の様子

■ 体験ブースにおける感染対策の工夫

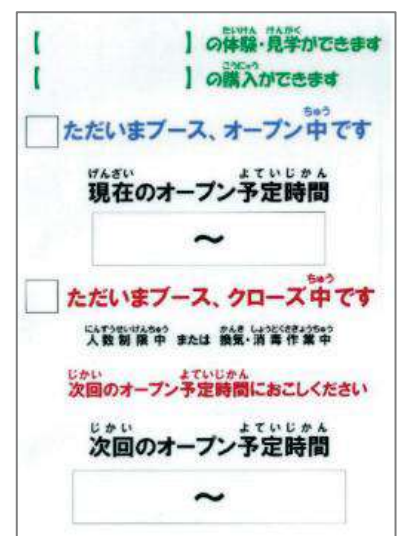
体験ブースを運営する団体毎に、人数制限・換気・消毒タイムの状況を記載した「案内シート」を作成してもらった。各ブースの人数制限は、団体毎にルールを作ってもらい、ボードに混雑状況等の状況を記入していただいた。各体験ブースでの感染対策は、団体の要望に応じてパーテーション等の提供は行ったが、基本的には団体の取組に任せる形とした。

5 活動の成果

「SDGs フェスタ」と題して、体験活動とSDGsの繋がりを示したことで、その認知度を高め、地域と共に考える機会とすることができた。

新型コロナウイルス感染症の影響で、多くの体験活動の機会が失われた社会情勢の中で、可能な限りの感染防止対策を講じ、多くの方々のご理解・ご協力を得て、これまでとは違う新しい生活様式を踏まえた体験活動の機会を提供できた。施設開放事業を実施する際のモデルケースとなると考えている。

コロナ禍だからなんでも中止にするのではなく、体験活動をしたいと思っている指導者方たちと相談しながら、こういった形であれば体験を提供できるか考えていきたい。



ブース用案内シート

2 児童・保護者・学校・行政・施設の協働で実現 4泊5日の長期集団宿泊活動

■ 活動名称
なすかしの森セカンドスクール

Point

学校や保護者との事前の丁寧なコミュニケーションと、感染防止対策により、コロナ禍でも4泊5日の長期集団宿泊活動を実現。

■ 団体・施設名称
国立那須甲子青少年自然の家

■ 所在地
福島県西白河郡西郷村

■ URL
<https://nasukashi.niye.go.jp/>



1 活動概要

■ 対象者
福島県西郷村と棚倉町の小学校8校の5年生
(児童 243 名が参加)

■ 開催場所
国立那須甲子青少年自然の家

■ 開催時期
2020年10月～11月 4泊5日

■ 申し込み方法
小学校・自然の家の連携により実施しており、
小学校ごとの申し込み制



なすかしの森セカンドスクール 2020 報告書



2 活動のねらい

参加児童のみならず、教師・保護者・教育支援スタッフ・施設職員が学びあう場として、「五者の育ちの場」となるよう、5つの視点の目標を掲げて実施。

■ 5つの視点の目標

自然の家	新学習指導要領の方向性を踏まえ、教科等に関連付けた活動プログラムを提案・実施することにより、「主体的・対話的で深い学び」につながり、集団宿泊活動の教育効果を高める。
児童	自然の家が有する教育環境や自然を生かした自然体験や生活体験をすることにより、「基本的な生活習慣」を体得するとともに、自己肯定感・コミュニケーション力や実践的な態度・行動力を養う。
教職員	自然の家の教育環境・教育資源を活用した教育活動を1週間程度実施することにより、カリキュラムマネジメントの視点を学び、資質、能力の向上を図る。
大学生	支援スタッフとして関わることにより、学校教育・社会教育の理解につながり、社会人としてのキャリア形成の一助とする。
保護者	長期間子供と離れて過ごすことにより、子供への愛着や子育ての振り返りの機会とする。

3 活動の内容

小学5年生が、なすかしの森に1週間滞在し、教科等に関連付けた自然体験活動を通して様々な学習をする。

■ スクールタイムとなすかしの森タイム

スクールタイム 8:30 ～ 15:30	<ul style="list-style-type: none">● 主体は学校側となり、標準時程に沿って教科学習を中心に実施。● 教科等に関連付けたプログラムを実施する時間。● 活動プログラム例：沢歩きハイキング（理科：流れる水のはたらき）、エコアカシテムアカデミーによる森のめぐみの体験学習（社会：私たちの森林と生活）、焼き板（図工）、野外炊事（家庭科：ごはんのみそ汁を作ろう）
なすかしの森タイム 15:30頃 ～ 翌8:30	<ul style="list-style-type: none">● 学校の教員は帰宅し、主体は施設側。教育支援スタッフが中心となって児童とともに過ごす。● 長期集団宿泊体験にあたる時間となる。● 活動プログラム例：計画立案、ナイトハイク、キャンプファイヤー又はキャンドルファイヤー等

■ コロナ禍の開催で変更した主な点

コロナ前と比較すると、スケジュールに余裕を持たせたことが大きな変更点。朝夕のつどいは原則実施しなかった。理由としては、子どもたちの体力の低下が挙げられる。疲れている状態だと感染しやすくなる。就寝時刻を早くし、起床時刻も余裕をもったスケジュールに変更した。

大学生スタッフの参加について、児童の保護者の了承を得るために、学生に抗原検査を受けてもらい、大学と細かな連携を取っていることを説明した。

児童の体調の確認は、基本的には体温のチェック、体温の他にだるさ、頭痛、腹痛など10項目を確認している。宿泊をする場合は、就寝時と起床時に子どもにチェック表を記入してもらっている。基本的には、チェック表は大学生のスタッフと職員でダブルチェックを行った。

4 工夫した点

■ 学校との丁寧な打ち合わせ

校長会・合同連絡会・各学校との丁寧な打合せによる相互理解、協働体制の確立を図った。

■ 保護者への感染防止対策に関する説明

各学校の保護者説明会に施設職員が出向いて、事業のねらいとともに感染防止対策を説明し理解を得た。保護者説明会用のスライドを作成して、感染対策の説明を行った。

■ 研修指導員研修会の実施

自然体験活動で感染防止対策を実施しながら、教科等に関連付けた体験活動プログラムとして学習指導案を作成し、質の高い体験活動を可能にした。

5 活動の成果

参加児童が回答したアンケート調査結果では、「基本的な生活習慣」「自己肯定感」「コミュニケーション」の各項目について、セカンドスクール実施の事前と事後の結果の比較時、さらに1か月後の追跡調査においても効果が確認された。参加児童からは「キャンドルファイヤーが心に残った」「(体験的な学習が)楽しくてわかりやすかった」「たくさん話げできた」などの声をいただいた。

学校現場で体験活動の時間が取れない。自然体験活動や宿泊体験の機会が制限されている中、可能な限りの感染対策を取り、少人数での事業を開催した。季節にあわせた様々な自然体験活動をはじめ、食事づくりなどの生活体験、異年齢層での日帰りや宿泊体験などの活動を体験することにより、心身のリフレッシュを図るとともに、基本的な生活習慣の確立や自立する力が身についた。

3 コロナ禍の「ソログルキャンプ」 で生きる力を育む

■ 活動名称
ソログルキャンプ（ソログループキャンプ）

Point

ソロだけど、近くには仲間がいるというコロナ禍に適したキャンプの一つの形。自分の力でできた経験で、自立心が育つ。

■ 団体・施設名称
ガールスカウト香川県連盟

■ 所在地
香川県丸亀市

■ URL 公開なし

1 活動概要

■ 対象者

ガールスカウトに所属する会員とその知人が対象

■ 開催場所

南川自然の家

■ 開催時期

令和2年11月（1泊2日）

■ 申し込み方法

ガールスカウト香川県連盟所属会員からの事前申込

2 活動のねらい・経緯

自然の中で仲間と協力し、楽しくキャンプをする。

ソログルキャンプの前に、文部科学省の委託を受け野外活動を実施した。久しぶりに野外でデイキャンプを行い、子どもは走り回り、野外で食べて、とても喜んでいて。この時の経験が、コロナ禍に野外活動を広げるきっかけになった。

3 活動の内容

1泊2日の宿泊キャンプで、ソロテントの設営、ミニ運動会、野外炊飯（一人鍋）、お一人様タイム等の活動を行った。

■ ソロテントの設営

宿泊場所は、廃校になった小学校をキャンプ場にした会場で、教室にソロテントの設営に分散してソロテントを設営した。小学校の教室の広さにテント4張を4隅に設置した。定員の半分以下とし、ソロテント同士の距離を離し、テントの出入口の向きも変えた。

ソロテントは、コロナ禍前に段ボールハウスで培ったノウハウを活かし、参加者各自がソロテントを自作した。スカウトは一人一人ロープを持ち歩き、テント間の距離を測り、テントの間隔を調整した。ビニール傘を何個かつないで、寝床を作った例もあった。各自テントが出来上がると、それぞれどんなテントを作ったかを見に行き楽しそうだった。

一人寝に対するさみしさ対策は今後の課題である。



ソロテントの設営

■ ミニ運動会

ミニ運動会の競技は、大勢で固まって行う団体戦はやめてソロ競技を入れるなど、競技候補を出しながら時間内にできる種目、接触を避けられる種目を選んだ。リーダーの中に幼稚園教諭などもいるため、競技アイデアを出してもらった。

■ ソロクッキング

ソロクッキングでは、各自に折り畳みの簡易コンロと焼き網、固形燃料を入れた「野外セット」を揃えた。夕食は、使い捨てのアルミ鍋で温かいものを煮る一人鍋という形でソロクッキングを行った。感染状況によってはキャンプが中止になる可能性があったため、参加費は取らない代わりに食材を各自で用意する形にした。それぞれが家であらかた材料を切ってきたり、一人分の材料を持ってきたりした。朝食は、食パンや野菜、ウインナーを各自が簡易コンロと網を使って焼いた。

飛沫対策用に、炊事場のテーブルのパーテーションを、現地に行ってから、園芸の支柱に緩衝材やラップを張って作った。



朝食をソロクッキング



野外セット

■ お一人様タイム

ソログルキャンプでは、冬場で体が冷えて体調を崩すこともあるため、風呂の時間を設定していない。風呂をやめたら時間に余裕ができ、それによってお一人様タイムを作った。

お一人様タイムでは、なかなか一人になれず、いかに自分から一人の時間を過ごすかに意識を向ける必要があった。(1年後のソログルキャンプでは、子どもも一人で過ごせるようになった。本を持ってきた子どもや、毛糸で遊んでいた子どももいた。)

4 工夫した点

■ ソロテントの工夫

コロナ禍でイベントが中止になり活動予算が浮いたので、100円均一ショップで売っている支柱などを柱に使いながら、各自がテントを自作した。この方法で自作したテントは、雨には耐えることができないので屋外での実施は難しい。屋内のホールや教室を広く使っている。

■ ソロクッキングの野外セット

お揃いの布バッグに、簡易コンロ・焼き網・ミニフライパン・固形燃料・軍手・マッチ・布巾を入れ、各自が持参している。野外セットは、自宅に持ち帰れるようにしている。令和3年度は年間10回以上の野外活動を計画。マッチを擦ることから始まり、だんだんとスキルアップできるようにしている。当初はマッチを擦るのを怖がる子どももいたが、今は大丈夫になっている。

■ 声掛けの工夫

一斉に行動する、というこれまでのガールスカウトの活動スタイルではなくなったので、まとまりに欠けるということがないように声掛けをした。各自が活動しているけれど、みんなの気配を感じられることが普通になるようにしていく。

5 活動の成果

新型コロナによる制約下でデイキャンプを開催し、野外での体験が子どもの心を開放する、ということを実感した。

コロナ禍前はグループで料理をすると、活発な子どもだけが料理し、年少の子は見るだけということもあった。ソロクッキングでは小学2年生でも自分の晩御飯は自分で作ろうと責任を持って取り組む。

4 大学生ボランティアとの試行錯誤で実現 地元木材を使ったオンライン体験活動

■ 活動名称

木 Bot Lab ～お家からオンラインで参加するハイブリッド体験活動～

Point

大学生ボランティアとの計 11 回の会合とトライアル実施を重ねて、地元の木材を使った木 bot を設計・制作するオンライン体験活動を開催

■ 団体・施設名称

周南市大田原自然の家

■ 所在地

山口県周南市

■ URL

<http://gokan-furusato.org/ootabara/>



1 活動概要

■ 対象者

小学校 5 年生から中学生（参加人数 4 名）

■ 開催場所

オンライン

■ 開催時期

令和 2 年 10 月 18 日・31 日（2 時間×2 日間）

■ 申し込み方法

一般公募

2 活動のねらい・経緯

コロナ禍で発達したオンラインツールと実体験とのハイブリッド体験活動の可能性の研究と、コロナ禍で子どもたちが自由に外遊びすることができない中での、木 Bot Lab を一つのツールとした体験活動プログラムの実施を目的とした。

■ 開催の経緯

コロナ禍により活動の見通しが立たない中、大学生ボランティアと一緒に Zoom を活用した体験活動を企画研究することとなった。令和 2 年 5 月から話し合いを始めて、計 11 回の会合とトライアル実施による見直しを重ねて 10 月に開催した。

3 活動の内容

オンラインツールの Zoom を使って、木のロボット「木 bot」を設計し、後日自宅に届いた部品を、それぞれの家でみんなと話しながら組み立て完成させるハイブリッドな体験活動。山口県の体験学習法である AFPY の手法の流れに沿ったプログラムを設計した。

※AFPY（Adventure Friendship Program in Yamaguchi）は、他者とかかわり合う活動を通して、個人の成長を図り、豊かな人間関係を築くための考え方と行動の在り方を学び合う、山口県独自の体験学習法。

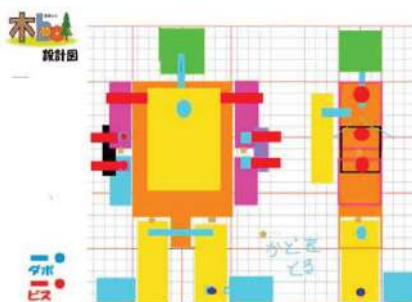
■ プログラムの流れ

第1回 10/18	木 bot の設計 <ul style="list-style-type: none">● キャンプ・カウンセラーが主導しながら、参加した子どもたちが2人1組のチームに分かれて、Zoomで話し合いながら、木のロボットを設計した。● 子どもたちがチームになって話し合う合意形成の過程が大事なので、チームで同じ一つの木 bot を設計。1チームには、進行役とサポートの2名がついた。
部品 発送	<ul style="list-style-type: none">● コロナ禍のため、主催者側が子どもたちの設計した木 bot の設計図に基づき、1週間かけて木で部品を作り、参加者に部品を郵送。
第2回 10/31	組み立て・仕上げ・振り返り <ul style="list-style-type: none">● 参加者がそれぞれの自宅からオンラインであつまり、設計図を確認しながら木 bot を組み立てた。● 参加者一人一人の個性を出すために、組み立てた木 bot にペイントデコレーションをして仕上げをした。● その後、各自の工夫やこだわりをみんなに発表をした。自分たちが設計したものを組み立てて感じたこと、工夫したところ、みんなからの意見を受けて、振り返る活動をした。

4 工夫した点

■ 試行錯誤を繰り返しバージョンアップ

11回のミーティングや運営側でトライアルをした振り返りの中から、木 bot のグループは少人数の方が良いことや、進行役の他にサポート役がいる方がよいこと等がわかり、試行を繰り返しながらバージョンアップした。



木 bot の設計図

5 活動の成果

■ 参加者の声

子どもたちの振り返りでは、楽しかった、未知との遭遇、ワクワクしたという声があった。

■ 大学生ボランティアの声

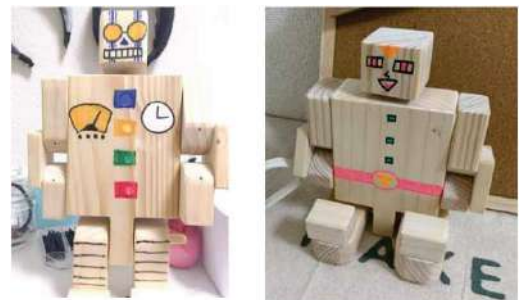
大学生からのフィードバックとして、「心の距離感を把握するのが難しいが、Zoomではマスクをしないので顔が見えるのは有効だった。また、対面での開催と違って、オンラインでは対話について独特のタイミングが必要。対面では子どもたちが一斉に話しはじめるという場面があるが、Zoomは同時に話し始めると聞き取りにくくなるので、その点の配慮が必要。」などの意見があった。

■ 活動の成果

木 bot を開催したことで、可能性が広がってきたと感じる。今後、同じような緊急事態となっても、体験活動が出来るという手ごたえがある。

大学生ボランティアとZoomの会合を継続していた中で、もう一つ別のオンラインイベントの開催に広がった。対象者を広げることにもつながり、短時間の活動のために時間をかけて集まらなくていいというメリットは大きいと気づいた。

オンラインは場所や、移動の時間が必要ないので、1時間の会議をこまめに開いても嫌がられない。学生は対面での会議や研修を好むが、オンラインは効率がよいというメリットがある。



完成した木 bot の作品

5 企業との協働×オンラインの価値発見 稲の生育で食と環境をリアルに体感

■ 活動名称

ハウス「食と農と環境の体験教室」知って、作って、食べて、つながって！

Point

企業とNPOが協働して、オンライン体験活動を開催。
全国各地のバケツ稲を生育して違いに気付くなど、オンラインならではのメリットや良さの発見につながった。

■ 団体・施設名称

特定非営利活動法人千葉自然学校
(ハウス食品グループ本社株式会社からの受託事業)

■ 所在地

千葉県千葉市

■ URL

https://housefoods-group.com/activity/event/taiken/online_report/



1 活動概要

■ 対象者

小学生以上の子どもがいる家族
全国から11家族が参加

■ 開催場所

オンライン開催

■ 開催時期

全2回のオンライン教室と自由参加の特別講座

■ 申し込み方法

ウェブサイトで募集・事前申込・抽選

2 活動のねらい

バケツ稲づくりやカレー調理、食品ロス等の環境問題に関する講座を通じて、食と農と環境のつながりの大切さを学ぶ。

3 活動の内容

ハウス食品グループのハウス「食と農と環境の体験教室」は、食育・環境教育活動を展開するNPO法人と、ハウス食品グループ本社CSR部が協働で行う体験型の教室。令和3年度は、コロナ禍の中、初めてのオンラインでの開催となった。

■ 体験教室プログラムの実施内容

第1回 6/5	<ul style="list-style-type: none">● 「バケツ稲」田植えの方法● 「食品ロスの現状」と私たちができることを学習● 「冷蔵庫にあまりがちな食材を使ったカレー」の調理デモ見学
特別講座 7/31	<ul style="list-style-type: none">● 「バケツ稲」栽培中のお困りごとやお悩み解決と個別アドバイス
第2回 9/11	<ul style="list-style-type: none">● 「バケツ稲」稲刈り～脱穀の方法● 「わが家の食品ロス対策カレー」発表● 「温暖化の現状」と私たちができることを学習

4 工夫した点

■ 参加者間の一体感を持ってもらう工夫

各家庭でのリアルな体験を、オンラインで集まった参加者間で共有し一体感を持ってもらうために、参加者限定の日々の成長記録（画像付き）を投稿できるサイトを開設した。

「うちのバケツ稲は今これくらい」「花が咲きました！」など生育状況の投稿があり、他の参加家族の生育状況の違いを知ることができた。全国から参加者がおり、気候も違う中で成長具合は異なる。地域での違いなど、思っていた以上に様々な刺激を受けながら活動していただけた。

食品ロスキーワードにカレーを作り、レシピを載せた投稿もあった。うちでも作ってみる、という情報共有もあった。

■ 自由参加の特別講座

田植えと稲刈りの間が半年空いてしまうため、その間もバケツ稲にがんばって取り組んでもらうための仕組みとして、7月に自由参加の特別講座を開催した。1回目にフードアドバイザーの先生に食品ロス対策カレーについて教えてもらった流れで、「夏休みの宿題」として、「我が家の食品ロス対策カレー」を作って、最終回にレシピを発表してもらうことにした。

■ レスキュー苗制度

現地協力団体の佐倉みどりネットの力を借りて「レスキュー苗制度」を作り、暑さで稲が枯れてしまったという2家族に、現地で育てている苗を送った。うまく栽培できなかつた、収穫量が少なかつたという家族もいた。「どうして育たなかつたんだろう？」「次はどうしたらたくさん収穫できると思う？」と前向きなやり取りを心掛け、チャレンジした成果として次につながる形で受け止めてもらった。

5 活動の成果

■ 参加者の声

コロナの心配や時間的な面で、現地に移動せずに体験ができ参加しやすかつたという声があつた。また、全国から参加者が集まれるのはオンライン開催の大きな特徴でありメリット。

■ 活動の成果

家庭でのバケツ稲栽培になつたことで、田んぼの体験では分からない米作りの苦勞、農家の大変さを体験してもらうことができた。田んぼにただ水を張って米が育っているように思うが、気温が上がるとどうなるか（水がお湯になり苗によくない、農家は水を流して温度調整をしているなど）、雨が降つたらどうなるか等を知ってもらう機会となつた。また、保護者から「バケツ稲に虫が寄つてきたりしませんか？」という相談があり、水が張つてある田んぼが多く生き物の大切な住処になっていることを実感してもらう機会につながつた。

■ オンライン体験活動のメリット

全国から参加者がおり、四国、関東、北陸、東北等気候も違う中で成長具合は異なり、思っていた以上に様々な刺激を受けながら活動していただけた。

この事業に限らずノウハウ的なものはオンラインが得意とするところである。5分、10分の講義的な動画をストックして、ライブラリ的に事前学習をしてもらうのはすごくいいかと思う。オンラインとリアルを組み合わせることで、事前学習・本番のリアル・復習の3つの構成が組めることを、オンラインに触れてみて感じた。

6 リアルな体験を活かす先端技術の活用 ARネイチャーラリー

■ 活動名称

タブレット機器を活用した野外活動（ARネイチャーラリー）

Point

関西学院大学の研究室と連携して、タブレット端末を使い、AR（拡張現実）を取り入れた新しい体験活動を実証研究。

■ 団体・施設名称

公益財団法人 日本アウトワード・バウンド協会
尼崎市立美方高原自然の家
（共同研究先）関西学院大学 甲斐研究所

■ 所在地

兵庫県美方郡香美町

■ URL

<https://www.obs-mikata.org/>



1 活動概要

■ 対象者

尼崎市内の小学5年生（3校約300人が体験）

■ 開催場所

尼崎市記念公園、尼崎市西武庫公園

■ 開催時期

2021年7月～11月

■ 申し込み方法

兵庫県型自然学校における、尼崎市教育委員会を通じた市内小学校からの指導者派遣要請依頼

2 活動のねらい

体験活動を通じて、自然への感性（4感：聴視嗅触）を育み、自然への理解を深める。また、仲間と協力する力を育む。バーチャルな世界とリアルな世界の融合を通して、実体験の学びをより深める。

■ 開発に至る経緯と背景

「ARネイチャーラリー」は、コロナ禍に長期宿泊事業に変わる事業として、小学校向けの日帰りの体験活動として新たに開発したプログラムである。2020年から関西学院大学の甲斐教授を中心として、共同研究を開始し、調査研究段階にある。

3 活動の内容

公園などの活動エリア内に設置された生き物のイラストをタブレット機器で読み込むと、イラストがマーカーとして起動するAR（拡張現実）を採り入れている。



トチ坊が課題を説明

起動画面では当施設のキャラクター「トチ坊」とともに文字情報と文字を読み上げた音声を提示し、ポイントでの課題実施を促すものとした。

各ポイントでは、視覚、触覚、嗅覚、聴覚を利用した体験（ネイチャーラリー）等を提供した。AR ネイチャーラリーの課題は共同研究先の関西学院大学と一緒に内容を検討した。

■ 事前学習

AR ネイチャーラリーでは、まず事前学習を行う。事前学習では、教室で写真を見てもらい、触るとどんな感じがするか、どんな音が聞こえるかなど、触感、匂い、音を想像して、ワークシートに記入する。

■ 当日の活動

活動の当日は、写真の現場に行き、事前に想像したものと実際に現地で感じたものをマッチングしてもらう。実際に体験した感覚をワークシートに記入し、振り返りの中で、想像と実際の感覚が異なることへの気づきや発見などを育む。また、現実の活動エリア内に設置された看板に、キツネやカエル、バッタ等のイラストが貼られており、タブレットを起動してかざすと、仮想現実でキャラクターが飛び出し、課題を説明する音声流れる。グループで課題を確認して、協力して取り組んでもらう。

各ポイントで課題としているのは、学校の先生方にもご協力いただける長縄跳びのような活動と、スパイダーウェブや綱渡りなどの指導に熟練の経験を要するものがある。

■ 事後学習

事後学習では、学校周辺で聞こえてほしい音や見えてほしい景色、匂いなどを考える機会をつくり、グループやクラスで共有する。



AR ネイチャーラリーの様子

4 工夫した点

■ 画面と音声での課題の提示

3人で1台のタブレット使用もしくは1台をグループで使用するので、皆が課題に取り組めるよう、音声でもポイントの課題が提示されるように工夫した。

■ ネットワーク環境がなくても利用可能

ネットワーク環境が無くても使えるアプリを制作して、iPad に実装し、使ってもらっている。

■ 課題を柔軟に変更できる

タブレットを使うと良いところは、設定した課題を柔軟に変えていける点である。今は10種類の課題があるが、20~30の課題を用意して、ニーズに応じて、地図上の課題を入れ替えることもできる。このような柔軟性は、IT機器を使った良いところで、各学校のニーズに対応することができる。

5 活動の成果

自然体験の中でIT機器を使うことに対して、肯定的に捉えてもらえるかが心配だった。しかし先生や児童にアンケートをとると、91%が肯定的に捉えてくれていた。今後もIT機器を使った活動をしていきたいという回答も93%であった。

今後は、美方高原でのリアルな活動が生きるように、事前学習でタブレットを使って自然の様子を想像してもらい、実際に施設でリアルなものに触れたときに子どもたちがどのように反応し、どのような影響があるかを調査する予定。次の段階では、仲間づくりや自然への感性がどうなったか、IT機器等を使ってどう広がったかという教育効果を探していきたい。



自然体験活動の指導者・実践者に向けたメッセージ



コロナ禍における集団宿泊活動の安全性確保と有効性について

独立行政法人国立青少年教育振興機構 理事 伊野 亘



新型コロナウイルス感染症の流行が長期化する中、児童・生徒の学習や生活等において様々な影響が続いています。特に、児童・生徒の「生きる力」をはぐくむ「自然の中での集団宿泊活動」は、多くの学校や地域で中止されている現状にあります。

また、コロナ禍における児童・生徒が抱えている体力低下、ストレス、生活習慣の乱れ、人間関係の希薄化等の課題は、各種の調査で明らかになっている状況です。

しかし、コロナ禍にあっても「自然の中での集団宿泊活動」を実施した児童・生徒への事前・事後アンケート（※1）では、「やる気」や「自信」「ソーシャルサポート」（仲間同士の助け合い）などは、有意に高まっており、逆に「ストレス反応」である「怒りの感情」や「引きこもり」の意識は有意に低くなったという結果がでています。

そこで、コロナ禍にあっても感染状況が許されれば、安全で効果的な集団宿泊活動や体験活動を実施するために、このガイドブックを参考に以下の2つの視点を大切に実施してほしいと願っています。一つ目は、子供たちの成長のために必要な集団宿泊活動や体験活動であることを、子供たち、保護者、教職員等が共通理解して、意欲的に実施できるようにすること。二つ目は、児童・生徒を受け入れる青少年教育施設等が、学校等関係団体と連携して感染防止対策等を丁寧に実施し、安全な体験活動を提供すること。こうした取組を実施し、より意欲的で安全な体験活動となるよう期待しています。

※1 「国立青少年教育施設における小・中学校の集団宿泊的行事に関する調査」報告



ニューノーマルにおける自然体験活動

特定非営利活動法人自然体験活動推進協議会 代表理事 佐藤 初雄



未だに先行きの見通せない昨今ですが、こればかりはどうすることも出来ないようです。私たちができることは、とにもかくにも、感染防止を徹底して体験の機会を提供することです。勿論、私たちが得意とする創意工夫をし、様々な方法を用いて、場合によっては、IT をフル活用してでも活動を実施することが大切だと思います。今回のこの調査では、具体的な事例を挙げているので、是非とも、参考にさせていただき安心安全な体験活動を実施していただければ幸いです。もしかすると、もっと他の方法もあるよということがあるかもしれません。その場合は、連絡を頂き、我々の仲間にも共有させていただけたらと思います。

未来を担う子供たちのために皆さんと共に手を携えてこの難局を乗り越えていきましょう。私たちの使命は体験を止めないことだと思います。

感染状況に応じ、柔軟に感染対策を選択する

山岳医療救助機構 代表・社会医療法人孝仁会北海道大野記念病院 医師 大城 和恵



この度の調査では、多くの施設が、自然体験活動の実施に、積極的で発展的な対応を講じられていらっしゃることを知り、大変感銘を受けました。コロナ禍が始まった年は、未知のウイルスに対し、可及的全てのリスクを排除しようという種の戦略をとらなければならない状況でした。しかし、リスクを完全には排除できないことを受け入れざるをえない結果を経験してきました。長期化する感染状況を鑑みると、自然体験活動の実施は、「効果」と「感染リスクの軽減」とのバランスの取り方を再考する機会が来ているように感じています。

今回の調査における施設の対応は、より厳格な感染対策を実施する施設と、感染対策を緩和し活動拡大に重きをおく施設がありました。ウイルスは、変異をしながら、人間社会と共生を探っていますので、私たちも、行動に変異をもたらしていきたいものです。施設運営は、厳格か緩和か、のどちらかの方針に絞った運営というより、それらのハイブリッド手法を用い、感染状況により厳格か緩和かを柔軟に選択できるようになると良いのではないかと思います。

プログラムを構築することは大変なご苦労だと思いますが、1つの開催行事の方法論を1つにするのではなく、新規感染者数の落ち着いている時期は緩和策の中で実施するプラン A、感染拡大傾向の中では厳格な対策下で行うプラン B、感染者急増中のピーク前後ではオンラインによるプラン Cなどを企画の時点で用意しておき、Aを目指しながらも、感染拡大時に備え、中止を選択しなくて済むようなプログラム設計ができると良いのではないかと感じました。

制約の中での柔軟な模索が、充実した活動を生む力に

公益財団法人ボーイスカウト日本連盟 事務局次長 吉村 敏



今回、調査の一環として、いくつかの団体のヒアリングに参加し、各現場の様子を確認することができました。「体験」活動には、「楽しい」「やりがいがある」「挑戦したくなる」という動機づけが大切であると考えますが、コロナ禍においては、ふだんの活動が制限されてしまう傾向が見受けられます。そのような中でも、今回のヒアリングをした団体では、感染対策と体験活動を見事に両立しながら展開されていました。ある団体では、ソログルキャンプとして、ふだんの活動以上に各個人が体験活動に挑戦でき、かつ、仲間と共有したり、励ましあったりする仕組みを作り出していました。また、他の団体では、農業（稲作）の体験を ICT を利用することで、より「稲」の成長を参加者個々が感じる体験ができていたようです。いずれも感染症対策から、模索し、辿り着いた活動であったようですが、感染症の心配がなくなっても、今後も活用できる充実したプログラムになっていると思います。感染症対策においても、それぞれの団体が活動内容に見合った内容でよく対応されていましたが、時には参加者の不安な気持ちに対して、柔軟な対応を行う試みもあり、たいへん参考になりました。さらに、参加者に役割を与えて感染症との付き合い方を学ぶ機会を与えるケースもありました。こういった取り組みから、改めて自然体験活動が、三つの密の回避やソーシャルディスタンスを確保しつつも、充実した活動を行なえることが、今回の調査でよくわかりました。これからも各団体の一層の活躍に期待しつつ、このような時こそ、充実した自然体験活動が進められることを願って止みません。

コロナ禍における自然体験活動のリスクマネジメント

大東文化大学 スポーツ・健康科学部 教授 中村 正雄



コロナ禍における自然体験活動には、感染症以外のリスクや感染症対策の実施に伴うリスクも複合的に存在するので、より高度なリスクマネジメントが求められます。平時よりも余裕のある活動計画を立案するとともに、どのような場面でどのようなリスクが存在するのかを事前に洗い出して、現実味のある対策を検討することが重要です。また、活動中にリスクを増大させる要因を監視して先行対応的にアプローチしていくことも、現場でのリスクマネジメントを洗練させる一助となります。

リスクマネジメントを進めていく上で大切なことは、望ましくないことが起こる可能性を予見して対処するだけでなく、そうすることで何を得たいのか、どうありたいのか、ということも踏まえてマネジメント（やりくり）していくことです。コロナ禍による様々な制約を受け入れつつ、コロナ禍こそその自然体験活動のあり方を模索し、各々ができることを実践していきたいものですね。使命感を持ってこの正念場を乗り越えていきましょう。

発行にあたって

文部科学省総合教育政策局地域学習推進課

現在、新型コロナウイルス感染症の影響により、青少年の日常生活において、本物に触れるなどの自然体験活動の機会の減少や格差が課題となっています。

文部科学省では、令和2年度から3年度にかけて、新型コロナウイルス感染症の影響下において、感染症対策をしながら子供たちにとって楽しい充実した体験活動の在り方について、まずは日帰りから1泊程度の短期の体験活動の実証事業を実施してきました。

また、実証事業を行っていただいた青少年教育団体や施設以外にも、新型コロナウイルス感染症の影響下において、青少年の成長のため、日々活動に励んでいる多くの青少年教育団体や施設があります。今回、そのような団体での創意工夫をこらした取組も把握するため、アンケート調査及びヒアリング調査を行い自然体験活動の事例収集を行いました。

それをまとめたのが今回の事例集です。この事例集は、自然体験活動の現場で感染症対策を行いながら子供たちにとって充実した体験活動を行うにはどうすればよいか考えておられる指導者の方に対して活動の参考となるよう、自然体験活動の場面ごとにポイントを示しています。

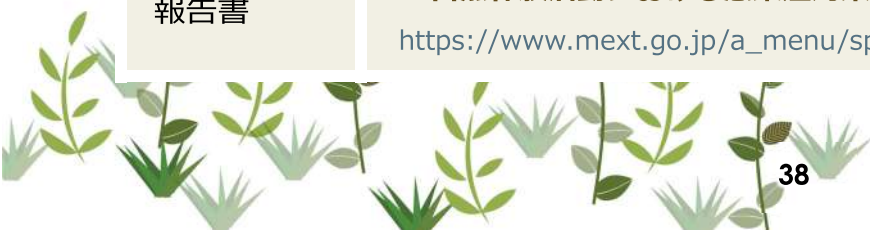
新型コロナウイルス感染症に関する情報は日々更新されていますので、最新の情報を踏まえながら、それぞれの活動においてこの事例集を参考としていただき、多くの子供たちが自然体験活動に参加し、たくさんの笑顔が広がることを期待しています。



新型コロナウイルス感染対策参考情報

- 掲載した資料や情報は、随時更新されているため「組織等の名称」や「参考情報の名称」のキーワードでインターネット検索をしてください。

組織等名称	参考情報の名称／URL
内閣官房	 新型コロナウイルス感染症対策 https://corona.go.jp/ 
	 新型コロナウイルスに関連した感染症対策に関する対応について https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/index.html 
文部科学省	 学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/mext_00029.html 
	 業種別ガイドライン https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/mext_00028.html 
	 保育所等における新型コロナウイルス対応関連情報 https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_09762.html 
厚生労働省	 放課後児童クラブにおける新型コロナウイルス対応関連情報 https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_09871.html 
	 国立青少年教育施設における感染防止対策事例集 https://www.niye.go.jp/about/kouhou/covid19.html 
調査研究報告書	 令和3年度 青少年の体験活動の推進に関する調査研究報告書 自然体験活動における感染症対策に関する調査研究 https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/ikusei/taiken/1405565.htm 





指導者 必見! 自然体験 GUIDE BOOK
コロナ禍でも安全安心



文部科学省

MINISTRY OF EDUCATION,
CULTURE, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN

🔍 たっぷり体験

総合教育政策局 地域学習推進課

〒100-8959 東京都千代田区霞ヶ関3-2-2 ☎ 03-5253-4111(代表)

https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/ikusei/mext_00935.html

発行 令和4年3月